

2026 年夏期巡回講座レポート
巡回型ロボットプログラミング講座

4. 地域・実施主体別編

目次

はじめに	1
第 1 章 地域・実施主体別分析の基本姿勢	2
第 2 章 全体配置・・・複数地域を巡回することの意味	3
第 3 章 春日井市・・・公民館主催講座と自主講座	5
第 4 章 瑞浪市・・・少人数・長時間講座と募集方法	8
第 5 章 多治見市・・・異なる複数回講座の構成	10
第 6 章 土岐市・・・小規模ロボット講座と缶バッジ制作	13
第 7 章 恵那市・・・複数コミュニティセンターとイベント型体験	16
第 8 章 ガールスカウト・・・既存団体という異なる実施主体	18
第 9 章 実施主体によって「成功」の意味が違う	21
第 10 章 募集方法と参加状況	22
第 11 章 施設担当者との関係	23
第 12 章 同じ教材でも地域ごとに形が変わる	24
第 13 章 地域施設を「学びへの入口」として見る	25
第 14 章 地域・実施主体別に見た共通点	26
第 15 章 地域・実施主体別に見た相違点	27
第 16 章 行政・施設担当者に向けた私案	27
第 17 章 今後確認したいこと	28
第 18 章 まとめ	29
付記 最終版の記録範囲	32

はじめに

この地域・実施主体別編では、2026 年夏期巡回講座を実施した地域・施設・実施主体ごとに整理します。

今夏巡回講座は、同じ自治体、同じ施設種別、同じ講座時間、同じ参加人数で実施されたものではありません。

実施場所には、公民館、コミュニティセンター、文化施設、学習館、地域イベント会場、ガールスカウト等の既存団体の活動場所などが含まれます。

また、募集方法、対象年齢、講座時間、参加費、保護者同席の有無、会場環境、参加者同士の関係、施設担当者の関わり方、講座の目的なども会場ごとに異なりました。

この地域・実施主体別編では、まず各地域・実施主体で確認された出来事や参加状況を整理します。その上で、「この地域だから」と地域性そのものに理由を求めるのではなく、募集方法、講座時間、参加人数、会場環境、保護者同席の有無、参加者同士の関係など、地域・施設・実施主体ごとに異なっていた実施条件に着目して比較します。

したがって、この地域・実施主体別編は、自治体や施設を評価・順位づけすることを目的とするものではありません。また、「応募人数が多かった施設が成功」、「参加人数が少なかった施設は需要が低い」といった単純な比較も行いません。それぞれの条件の中で何が起きたのかを整理し、今後の地域講座や施設企画を考えるための材料とします。

第1章 地域・実施主体別分析の基本姿勢

1-1. 同じ尺度で比較しない

今夏巡回講座には、15分程度のイベント型体験から180分の講座まで含まれます。

また、単発講座と4回構成講座、保護者同席型と子ども中心型、初対面の参加者が集まる講座と既存団体の活動として行う講座、無料体験と参加費を伴う講座など、実施条件は大きく異なります。

そのため、この地域・実施主体別編では、各地域・施設・実施主体を同じ尺度で単純に比較することはしません。

1-2. 応募数は「需要」そのものではない

応募数は、講座への関心や参加状況を考えるための重要な情報です。

一方で、応募数には、告知方法、広報媒体、学校経由の案内の有無、曜日、時間帯、施設の認知度、過去の開催実績、家庭が講座情報に触れる機会、他行事との重複など、複数の条件が関係している可能性があります。

そのため、応募数が少ないことを、そのまま地域における需要の低さとは判断しません。

1-3. 参加人数と講座中に起きたことを分けて見る

参加人数が定員に届かなかった講座もありました。

一方、そのような講座の中でも、自由プログラミングを長く続ける、参加者同士で教え合う、個々の進度に合わせて活動するなどの場面が確認されています。

したがって、この地域・実施主体別編では、応募数・参加人数などの「参加状況」と、講座中にどのような出来事が観察されたかを分けて整理します。

1-4. 地域差より「条件差」として読む

この地域・実施主体別編では、「この地域だから、このような反応が起きた」と地域性そのものに理由を求めることはしません。

今回確認できるのは、それぞれの地域・施設・実施主体に設定された条件の中で、どのような出来事が起きたかということです。

そのため、地域間の違いを固定的な「地域差」として捉えるのではなく、募集方法、講座時間、参加人数、会場環境、保護者同席の有無、参加者同士の関係など、実施条件の違いとして整理します。

第2章 全体配置・・・複数地域を巡回することの意味

2-1. 巡回型という実施形態

今夏巡回講座では、一つの施設に固定せず、複数の自治体・施設を巡回して講座を実施しました。

同じロボット教材や Scratch 教材を使用しながら、会場規模、参加人数、募集方法、施設担当者の関わり、保護者同席の有無、講座時間などが異なる条件で実施しました。

このため、一つの会場だけでは確認できない、条件の違いによる講座中の出来事や参加状況の違いを並べて見ることができました。

2-2. 別の会場で再び確認できる

単発講座では、一つの施設で一度実施して終了する場合があります。

一方、今回の巡回型講座では、同じ夏の期間中に、共通する教材や課題を用いた講座を、異なる条件の会場で繰り返し実施しました。

そのため、一つの会場で見られた出来事について、別の会場でも同じような出来事が見られるのか、あるいは異なる反応が見られるのかを確認する機会がありました。

ただし、会場ごとに実施条件が異なるため、「別の会場でも同じことが起きた／起きなかった」という結果だけで、特定の方法の効果を判断するものではありません。

2-3. 観察を次の講座で試す

巡回の中では、ある会場で確認された出来事を受けて、次の講座で説明方法や進め方を変更することがありました。

例えば、下記のような変更です。

- 笠置コミュニティセンターで、マウス左ボタンが分からず操作が止まる子どもが見られた
→その後の講座で、左ボタンに赤いシールを貼って説明する方法を試した
- えなしこどもフェスタ 2026 で、RGB による白色点灯を説明した
→その後の瑞浪市総合文化センターでは、R (赤)・G (緑)・B (青)を個別に点灯し、最後に三色を同時に点灯する方法を試した
- 瑞浪市総合文化センターで、予定した追加課題を出さず自由プログラミングの時間を取ったところ、参加者が長時間プログラミングを続ける場面が見られた

→その後の多治見市「マナビバ！」でも、自由プログラミングの時間を多く取った

これらは、変更した方法が以前より優れていたことを示すものではありません。

今夏巡回講座では、ある会場での観察を受けて小さな変更を加え、別の会場で試し、その結果を再び観察するという流れを繰り返すことができました。

この点は、複数地域を巡回して講座を実施したことによって生まれた特徴の一つです。

第3章 春日井市・・・公民館主催講座と自主講座

3-1. 鷹来公民館

鷹来公民館では、年少者対象講座の定員 8 組に対して 33 組の応募があり、8 組が参加しました。年長者対象講座は 5 組の応募があり、4 組が参加しました。

2 講座を合わせた施設独自アンケートは 11 件でした。

講座内容と講師対応については、「満足」または「まあ満足」がそれぞれ 11 件でした。また、「同様の講座があれば受講したい」は 11 件でした。

講座情報を知った媒体では、「広報春日井」が 9 件でした。今回の鷹来公民館では、広報春日井が講座を知る主要な情報経路の一つになっていたことが確認できます。

3-2. 知多公民館

知多公民館では、定員 8 組に対して 41 組の応募がありました。

参加者は 8 組で、保護者同席を前提とした講座として実施しました。

講座では、講師による S 字走行の身体実験だけでなく、保護者と子どもが一緒に S 字を歩く実験も行いました。

そのため、保護者はパソコンやマウス操作を補助するだけではなく、子どもと同じ課題を一緒に体験する場面もありました。

3-3. 気噴南公民館

気噴南公民館では、こどものプログラミング教室による自主講座として、7月15日、8月5日、8月19日、9月2日の4回、ロボットプログラミング講座を実施しました。講座時間はいずれも60分で、参加者数は順に8名、3名、4名、3名でした。

鷹来公民館と知多公民館が公民館主催の単発講座であったのに対し、気噴南公民館では自主講座として複数回実施しました。同じ春日井市内でも、主催者、募集方法、講座回数、参加人数などの条件が異なっていました。

8月5日と8月19日には、組み立て式ロボットを使用しました。

8月5日は組み立てに時間を要し、予定していたプログラミングまで進みませんでした。

8月19日は組み立て後にプログラミングを行いましたが、必要な拡張機能の確認に時間を要しました。

この事例では、ロボットを動かすプログラムだけでなく、機材の組み立てや開発環境の確認も講座時間に含まれました。組み立て式ロボットを使用する場合には、通常の自動車型ロボットを使用する講座とは異なる時間配分が必要になると考えられます。

3-4. 保護者の参加状況

知多公民館では、保護者8名のうち男性6名、女性2名でした。

ただし、この1回の参加状況だけから、春日井市や保護者全体の傾向を一般化することはできません。

今回確認できたのは、父親を含む保護者が、子どもと一緒に身体実験やロボットプログラミングへ参加していたという事実です。

保護者同席型講座では、操作補助だけでなく、子どもと同じ課題を一緒に試す形もあり得ることが確認できました。

3-5. 高応募をどう読むか

春日井市の 2 公民館では、鷹来公民館 33 組、知多公民館 41 組という応募がありました。

ただし、この応募数だけから、「春日井市ではロボットプログラミングへの需要が高い」と結論づけることはできません。

応募数には、広報媒体、施設の認知度、夏休み講座としての位置づけ、保護者同席型という形式、開催日時など、複数の条件が関係した可能性があります。

そのため、この地域・実施主体別編では、応募数そのものだけでなく、「どのような情報経路で講座を知ったのか」「どのような形式で募集されたのか」といった条件も合わせて確認します。

3-6. 春日井市の事例から考えられること

今回の春日井市での実践から、少なくとも下記の点を整理できます。

- 鷹来公民館では、「広報春日井」が講座を知る主な情報経路の一つになっていた
- 鷹来公民館、知多公民館ともに、定員を大きく上回る応募があった
- 知多公民館では、保護者同席型の講座として、保護者と子どもが同じ課題を一緒に体験する場面があった
- 保護者同席は、操作補助だけでなく、子どもと同じ課題を共有する形にもなり得る
- 施設アンケートでは、家庭では実施しにくい体験を地域施設に求める声も確認されている
- 気噴南公民館では、60 分の自主講座を 4 回実施した
- 同じ春日井市内でも、公民館主催の単発講座と自主講座では、主催者、募集方法、講座回数、参加人数などの条件が異なっていた

これらは、春日井市全体の特徴を示すものではありません。

今回の 3 公民館で設定された主催者、募集方法、講座回数、保護者同席の有無などの条件の中で、どのような参加状況や反応が見られたかを整理したものです。

第4章 瑞浪市…少人数・長時間講座と募集方法

4-1. 3時間講座

瑞浪市総合文化センターでは、180分（3時間）のロボットプログラミング講座を複数回実施しました。

通常の90分講座より長い時間を設定し、RGB（赤・緑・青）指定によるLED点灯、S字走行、自由プログラミング、追加課題などを扱いました。

講座時間に余裕があったため、予定した課題を終えた後に自由プログラミングの時間を取ることができた回もありました。

4-2. 少人数の講座で見られたこと

8月5日の講座は、参加者2名で実施しました。

定員8名に対して参加人数は少ない状況でしたが、講座中には、2名が1時間以上自由にプログラミングを続ける場面が見られました。

また、初対面の参加者同士で教え合う、四角く走るプログラムを試す、ロボットを低速で走らせるなど、予定していなかった活動へ広がる様子も確認されました。

これらは、参加人数が少なかった講座で実際に観察された出来事です。

ただし、これらの行動が少人数であったことによって起きたものかどうかは、この事例だけでは判断できません。

4-3. 参加人数と講座中の出来事を分けて見る

行政や施設が講座を企画する場合、定員に対する応募数や参加人数は重要な情報です。

一方、参加人数が少なかった講座でも、参加者が長時間自由にプログラミングを続ける、参加者同士で教え合うなどの場面が観察されました。

そのため、この地域・実施主体別編では、応募数・参加人数という「参加状況」と、講座中にどのような行動や出来事が見られたかを別の情報として整理します。

少人数であること自体を肯定的・否定的に評価するのではなく、それぞれの条件の中で何が起きたかを確認します。

4-4. 募集方式の変更

瑞浪市総合文化センターでは、2026 年度から募集方法が変更され、全児童への紙案内配布から Web 案内へ移行しました。

各回定員 8 名に対して、応募者数は 4 名、3 名、3 名、参加者数は 4 名、2 名、3 名でした。

施設担当者からは、募集方法の変更が応募人数減少の一因ではないか、という見方が示されています。

また、施設には「今年は講座は無いのですか？」という問い合わせもあったと聞いています。

これらは、募集方式の変更と応募人数との関係を考える材料の一つですが、今回の情報だけから因果関係を特定することはできません。

4-5. 応募数をそのまま需要と読まない

施設からの情報では、過去には全児童への紙案内配布を行い、定員を大きく上回る応募があったとされています。

そのため、2026 年度の応募人数が少なかったことだけから、「ロボットプログラミングへの関心が低かった」と判断することはできません。

募集方法、情報への接触機会、開催日程、他の行事との重複など、複数の条件が関係している可能性があります。

今回確認できるのは、募集方式が変更された年度に、過去より応募人数が少なかったということです。

4-6. 募集方法を変更する時に考えられること

紙から Web へ募集方法を変更することには、印刷物や配布作業の削減、情報更新のしやすさなどの利点があります。

一方で、利用者側では、自分で情報を探す必要が生じる、従来の紙案内を待つ、募集方法が変更されたこと自体に気づかない、Web や SNS を日常的に見ない、といった状況も考えられます。

今回の事例だけから、紙と Web のどちらが適切であるかを判断することはできません。

ただし、募集方法を変更する場合には、「募集方法が変わったことをどのように知らせるか」という点も検討事項の一つになり得ます。

4-7. 瑞浪市の事例から考えられること

今回の瑞浪市での実践から、下記の点を整理できます。

- 180 分講座では、予定した課題に加えて自由プログラミングの時間を取ることができた
- 参加者 2 名の講座で、長時間自由にプログラミングを続ける、参加者同士で教え合うなどの行動が観察された
- 応募数・参加人数と、講座中に観察された出来事は分けて考える必要がある
- 2026 年度は、募集方法が紙案内から Web 案内へ変更された
- 施設担当者からは、募集方法の変更と応募人数の減少との関係を指摘する見方が示された
- 募集方法を変更する場合、その変更自体をどのように利用者へ伝えるかも検討事項になり得る

これらは、瑞浪市全体の特徴を示すものではありません。

今回の講座時間、参加人数、募集方法などの条件の中で、どのような参加状況や講座中の出来事が確認されたかを整理したものです。

第 5 章 多治見市・・・異なる複数回講座の構成

5-1. 多治見市での複数の実施形式

多治見市では、多治見市学習館での少年少女発明クラブ、旭ヶ丘公民館・市之倉公民館での「マナビバ！」など、異なる形式で講座を実施しました。

少年少女発明クラブは 2 回構成のロボットプログラミング講座ですが、1 回目と 2 回目の実施間隔は約 4 か月あります。一方、旭ヶ丘公民館、市之倉公民館の「マナビバ！」は 4 回構成として実施しました。

同じ複数回講座でも、講座回数だけでなく、実施間隔や参加者が前回の経験をどの程度持ち越せるかなど、条件には違いがありました。

5-2. 複数回講座でも構成は同じではない

複数回講座では、前回に扱った内容を確認しながら、新しい課題を加えたり、それまでに扱った内容を組み合わせたりすることができます。

ただし、講座間隔が短い場合と、数か月空く場合とでは、参加者が前回の内容をどの程度覚えているか、どこまで連続した学習として捉えられるかは異なる可能性があります。

そのため、この地域・実施主体別編では「複数回講座」という名称だけで同じものとして扱わず、回数、実施間隔、参加者の継続状況などを含めて整理します。

5-3. 旭ヶ丘公民館

旭ヶ丘公民館では、自由課題の時間になると、自分で試し始める子どもがいる一方、「自由に」と伝えても手が止まる子どもも見られました。

同じように自由時間を設定しても、参加者によって取り組み方が異なっていました。

また、4回目には、友人2名、兄弟2名の4名が互いに教え合う場面が見られました。

この教え合いが4回参加したことによって生まれたものか、もともとの友人・兄弟関係によるものか、自由時間の設定や課題内容が関係したのかは判断できません。

今回確認できたのは、4回目の講座で、参加者同士が自然に教え合う場面があったということです。

5-4. 市之倉公民館

市之倉公民館の最終回では、自由プログラミングの時間を多く取りました。

参加者は、リモコン操作、独自の走行、距離センサーを使った衝突回避、ヘッドライト点灯、音楽演奏など、それまでの講座で扱った内容を組み合わせながらプログラミングしていました。

また、子どもが保護者にリモコン操作を教え、一緒に試す場面も見られました。

ここでも、最終回だったことがこれらの行動の直接的な原因であるとは判断できません。

一方で、それまでの回で扱った内容を、参加者自身が選び、組み合わせて使う場面が確認されました。

5-5. 4 回構成をどう考えるか

4 回構成について、講師所感では、今回の参加者や講座内容との組み合わせでは、一定のまとまりをつくりやすい回数だったと感じています。

ただし、この所感から、「4 回が最適である」、「回数を増やせば学習効果が高くなる」と判断することはできません。

参加者の年齢、興味、講座時間、実施間隔、扱う課題などによって、適切な回数や構成は変わる可能性があります。

また、回数を増やすことと、内容を難しくすることは別に考える必要があります。

今後、別の地域や異なる参加者構成でも複数回講座を実施する機会があれば、回数や実施間隔と、参加者の行動の変化を改めて観察する必要があります。

5-6. 多治見市の事例から考えられること

今回の多治見市での実践から、下記の点を整理できます。

- 2 回構成と 4 回構成という異なる複数回講座を実施した
- 同じ複数回講座でも、実施間隔や継続の仕方は同じではなかった
- 4 回構成講座では、前回までに扱った内容を次の回でも使用する場面があった
- 自由課題では、自分で進める子どもと、手が止まる子どもの両方が見られた
- 旭ヶ丘公民館の 4 回目では、参加者同士で教え合う場面が確認された
- 市之倉公民館の 4 回目では、それまでに扱った複数の内容を参加者自身が組み合わせて使用する場面が見られた
- 講座回数だけでなく、実施間隔や参加者の継続状況も含めて考える必要がある

これらは、「4 回構成にすれば同じことが起きる」ということを示すものではありません。

今回の複数回講座の中で、どのような行動や変化が観察されたのかを整理し、今後別の条件でも同様の出来事が見られるかを確認するための材料とします。

第 6 章 土岐市…小規模ロボット講座と缶バッジ制作

6-1. 鶴里公民館

鶴里公民館では、90 分のロボットプログラミング講座を実施しました。

参加者は 5 名で、定員 8 名には届きませんでした。

施設担当者からは、同日に別行事と重なったことも理由の一つとして挙げられました。

S 字走行では人体実験を行い、実際のプログラミングは思い通りに走らせることが難しい場面がありましたが、S 字走行ができた時には、声や反応が大きくなる場面が見られました。

施設側からは、想像していたよりロボットを走らせられた、来年も実施したい、続編があれば実施したいという反応がありました。

6-2. 参加人数だけで評価しない

鶴里公民館では、参加人数 5 名という数字だけを見ると定員には届きませんでした。

しかし、同日行事との重複という外部条件があり、講座そのものについては、肯定的な反応がありました。

ここでも、応募・参加数と講座評価を分けて考える必要があります。

6-3. 曾木公民館の夏祭り

8月14日の曾木公民館では、曾木町夏祭りの中で缶バッジ制作体験を実施し、58個を制作しました。通常講座とは異なり、短時間で参加できるイベント型の実施でした。

会場には自由に触れられるイモ虫型ロボットも置きました。講師観察メモには、小さな子どもがロボットに触れる様子が記録されています。

一方、缶バッジのプレスでは失敗が複数発生しました。床面、用紙の厚さ、プレス機の状態、操作方法など複数の条件が考えられましたが、どの条件が主な理由だったかは特定できませんでした。

6-4. 駄知公民館の缶バッジ制作講座

8月29日の駄知公民館では、ロボットではなく、缶バッジ制作を主活動とした講座を実施しました。

参加者は4名で、年少の子どもを含め全員がCanvaを使ったデザイン作成に挑戦しました。

保護者のサポートを受けながら、オリジナルデザインの制作を進めました。

また、全員が保護者と一緒に缶バッジプレスを体験しました。

6-5. 終了後も続いた制作

講座時間終了後も、手書きデザインによる缶バッジ制作を続ける子どもがいました。

解散が難しいほど続けており、講師からは「もっとやりたかった様子だった」という観察が記録されています。

公民館独自アンケートでは、4名全員が講座時間を「短い」と回答しました。講座終了後も制作を続けた子どもがいたという講師観察と、回答の

方向は一致しています。ただし、それぞれの参加者が同じ理由で「短い」と回答したかどうかは分かりません。

6-6. 缶バッジは主活動か補助活動か

別会場では、ロボットプログラミング後の缶バッジ制作で、それほど大きな反応が見られなかった例がありました。

一方、駄知公民館では、缶バッジ制作そのものを中心に実施し、講座終了後も制作を続ける子どもが見られました。

このことから、「缶バッジは人気がある／ない」ではなく、「講座の中で何を主活動として位置づけるか」によって反応が変わる可能性があります。

6-7. 子どもと保護者でパソコンを使う入口

駄知公民館の自由記述には、「パソコンを子どもと保護者で触る機会がないのでよかった」という回答が1件ありました。

この点は、ロボットプログラミングとは別の形で、地域施設がデジタル体験への入口になる可能性として考えられる材料の一つです。

6-8. 素材と機器の状態

曾木公民館と駄知公民館では、いずれも缶バッジのプレスに失敗する場面がありました。

曾木公民館では、後日プレス機への注油や操作方法、素材の変更などの確認も行っています。

駄知公民館では、使用する素材を変更した後はプレスできました。

これらの記録から、プレス機だけでなく、素材、用紙、機器の状態、操作方法など複数の条件を確認する必要があると考えられます。

ただし、今回の記録だけから、特定の素材や機器状態を失敗の原因と断定することはできません。

6-9. 土岐市の事例から考えられること

今回の土岐市での実践から、次の点を整理できます。

- 鶴里公民館では、参加者 5 名のロボットプログラミング講座を実施した
- 同日に別行事があり、施設担当者からは参加人数に関係した可能性があるという見方が示された
- 曾木公民館では、夏祭りの中で短時間の缶バッジ制作体験を実施し、58 個を制作した
- 駄知公民館では、4 名の子どもと保護者が 90 分の講座として Canva によるデザインと缶バッジ制作を体験した
- 駄知公民館のアンケートでは、4 名全員が講座時間を「短い」と回答した
- 同じ缶バッジ制作でも、地域イベントの中で行う場合と、参加者を決めた講座として行う場合では、実施条件が異なっていた
- 曾木公民館と駄知公民館の両方でプレス失敗があり、素材、機器、操作方法など複数の条件を確認する必要があるが残った

これらは、土岐市全体の特徴を示すものではありません。ロボットプログラミング講座、夏祭りでの短時間体験、子どもと保護者による制作講座という異なる条件の中で、何が確認されたかを整理したものです。

第 7 章 恵那市…複数コミュニティセンターとイベント型体験

7-1. 複数施設を巡回する形

恵那市では、笠置コミュニティセンター、武並コミュニティセンター、山岡コミュニティセンター、上矢作コミュニティセンターといった複数のコミュニティセンターで講座を実施しました。

また、恵那文化センターで開催された「えなしこどもフェスタ 2026」にも出展しました。

同じ自治体の中でも、施設ごとに参加人数、会場条件、講座内容が異なりました。

7-2. 笠置コミュニティセンター

笠置コミュニティセンターでは、Scratch とロボットプログラミングを実施しました。

この時、マウス左ボタンが分からない子どもが複数いました。

この観察を受け、その後の講座では左ボタンに赤いシールを貼る方法を試しました。

また、S 字走行では身体実験後も実機が思い通りに動かず、子どもたちが自分で修正して何度も試す場面が見られました。

7-3. 山岡コミュニティセンター

山岡コミュニティセンターの Scratch 講座では、講座冒頭にマウス操作を説明するよう変更しました。

左ボタンの赤いシールを使い、「赤いシールをポチっとする」「赤いシールを押したままマウス全体を動かす」と説明しました。

笠置コミュニティセンターで見つかった課題が、同じ恵那市内の別施設で説明方法を変更した例です。

7-4. 上矢作コミュニティセンター

上矢作コミュニティセンターでは、ロボットプログラミングを実施しました。

S 字走行では、思い通りにロボットを走らせることが難しい場面がありましたが、走行できた時には、声や反応が大きくなる場面が見られました。

一方、缶バッジ制作は、ロボットプログラミングほど大きな反応にならなかった可能性があります。

参加者の関心が、S 字走行の続きへ向いていた可能性も考えられます。

7-5. えなしこどもフェスタ 2026

当該イベントでは、1 回 15 分の短時間体験版を実施しました。
参加者は 41 名でした。

実施内容は、ヘッドライト点灯（光の三原色）、直進走行、スピンなど、
短時間で結果を確認できる項目を中心としました。

通常講座のような長い試行錯誤は難しい一方で、短時間でロボットに
触れる入口の一つになったと考えられます。

7-6. イベントから通常講座へ

えなしこどもフェスタ参加者の一人が、翌週の武並コミュニティセン
ター・Scratch 講座へ参加し、さらに同日午後のロボットプログラミング
講座にも参加した事例を 1 件確認しました。

7-7. 恵那市の事例から考えられること

恵那市では、同一自治体内で複数施設を巡回したことにより、一施設で
変更した説明方法を別施設でも試すことができました。

また、イベント型体験から通常講座へ参加した事例を 1 件確認しまし
た。

ただし、施設規模や参加者構成などの条件が異なるため、同じ教材を使
用しても同じ反応が起きるとは限りません。

第 8 章 ガールスカウト…既存団体という異なる実施主体

8-1. 公募型講座との違い

公民館講座では、初対面の参加者が集まることがあります。

一方、ガールスカウトでは、講座開始前から、スカウト同士、スカウト
とリーダー、リーダー同士に関係があります。

このため、ガールスカウトで確認された相談、操作交代、待つ行動などを一般公募型講座でも同じように起きるものとして扱うことはできません。

8-2. 募集人数とは異なる評価条件

公民館講座では、応募人数や定員に対する参加人数が参加状況を考える情報になります。

既存団体では、一般募集ではなく、団体活動の中に講座をどのように組み込むかが中心になります。

そのため、公民館講座と同じ定員充足率で比較することは適切ではありません。

8-3. リーダー向け体験会

一部の団では、スカウト向け講座の前にリーダー向け体験会を実施しました。リーダー自身が **Scratch** やロボットプログラミングを体験し、本番での役割や時間配分を確認しました。

本番では、リーダーがパソコン操作を補助する、安全面を確認する、写真撮影や缶バッジ制作を担当するなど、団や講座ごとに異なる役割を担いました。

8-4. 8月30日の2名1組講座

8月30日の第19団では、スカウト15名、リーダー7名が参加しました。年少者と年長者による2名1組を中心に講座を実施しました。

年少の参加者が複数おり、マウス操作などに時間を要したため、**Scratch** では予定内容の一部を割愛し、ロボットプログラミングもLEDの白色点灯とS字走行を中心としました。

講師観察メモには、進行の速い参加者が、操作に時間を要する参加者を待つ場面が記録されています。ただし、既存の団体活動やペア構成など、複数の条件が関係した可能性があります。

8-5. 9月6日の2名1組講座

9月6日のガールスカウト・チッタガールでは、スカウト12名、リーダー6名、保護者2名が参加し、2名1組で講座を実施しました。

パソコン操作の交代や相談が自然に行われ、S字走行ができた参加者に他の参加者が方法を尋ねる場面もありました。

リーダーはプログラムの内容へ直接介入するより、操作面や安全面の補助を中心にしていました。

一方、S字走行が思い通りにできなかった参加者について、講座後のアンケート確認から、ロボットのモーターに不具合があった可能性が浮かびました。

講座中に機材を交換して確認していないため、不具合が原因だったとは断定できません。

8-6. 9月13日の3名1組講座

9月13日のガールスカウト・名古屋協議会では、スカウト24名と入団希望者1名、リーダー15名、保護者12名が参加しました。

スカウトは3名1組で活動しました。

操作者を決める際に、互いに譲り合う場面がありました。また、年少の参加者が多く、マウス操作に時間を要したため、予定していた内容の一部を割愛しました。

缶バッジ制作は講座中に並行して行わず、講座終了後に別室でまとめて実施しました。参加人数や進行状況に応じて、講座本体と制作工程を分けた事例です。

8-7. 多人数・チーム型講座で確認できたこと

2名または3名で使用する講座では、操作交代、相談、譲り合い、参加者同士で方法を尋ねる場面が確認されました。

一方、参加人数、年齢構成、マウス操作への慣れ、会場の広さ、リーダーや保護者の支援などの条件が異なっていました。

どの条件がそれぞれの行動に関係したのかは特定できません。

また、既存の関係を持たない一般募集講座でも、同じチーム運営が成立するかは分かりません。

8-8. 別冊との関係

ガールスカウトにおける団ごとの違い、リーダーとの役割分担、チーム編成については、別冊「ガールスカウト・既存団体編」で詳しく扱います。

この地域・実施主体別編では、既存団体では一般公募型講座と異なる実施条件があり、参加人数に応じて操作交代や制作工程を組み直した事例として整理します。

第9章 実施主体によって「成功」の意味が違う

9-1. 自治体・公民館主催

自治体・公民館主催では、応募人数、参加率、アンケート結果、次年度実施の意向などが、事業を振り返る情報として扱われることが考えられます。

9-2. 地域学習事業

「マナビバ！」のような複数回講座では、継続参加の状況、前回までに扱った内容の使用、参加者同士の関わりなども確認事項になります。

9-3. イベント

イベント型体験では、短時間で多くの参加者が体験できることや、その後の通常講座へつながるかどうか、確認事項の一つになります。

通常講座と同じ到達内容を求めるものではありません。

9-4. 既存団体

ガールスカウトなどの既存団体では、団体活動との関係、チーム編成、リーダーや保護者との役割分担なども確認事項になります。

9-5. 制作型講座

缶バッジ制作では、完成物を持ち帰ること、子どもと保護者でデザインすること、デジタル作業と手作業を組み合わせることなど、ロボットプログラミングとは異なる体験が含まれます。

このように、実施主体や講座形態によって、確認する事項も異なります。

第 10 章 募集方法と参加状況

10-1. 大きな差

今回の夏期巡回講座では、定員を大きく上回る応募があった講座と、定員に届かなかった講座の両方がありました。

この差を、講座テーマだけで説明することはできません。

10-2. 高応募の例

春日井市では、鷹来公民館で 33 組、知多公民館で 41 組の応募がありました。

鷹来公民館の施設独自アンケートでは、講座情報を知った媒体として「広報春日井」が 9 件でした。

10-3. 定員未達の例

瑞浪市、多治見市、土岐市などでは、定員に届かなかった回がありました。

募集方法の変更、他行事との重複、曜日、時間帯など、複数の条件が考えられます。

ただし、どの条件がどの程度関係したかは確認できません。

10-4. 募集方法も講座設計

これまで、講座設計というと、内容、時間、教材を中心に考えていました。

しかし、地域施設での学習機会では、講座を知る、内容を理解する、申し込む、参加するまでを含めて考える必要があります。

10-5. 「入口」の存在を届ける

地域施設に講座を用意しても、その存在が知られなければ参加にはつながりません。

そのため、「学びへの入口」には情報の届け方も含まれると考えています。

第 11 章 施設担当者との関係

11-1. 会場運営を支える存在

施設担当者は、募集、受付、机椅子設営、アンケート、写真撮影、広報、参加者への案内等、講師が直接行わない部分を担っています。

11-2. 設営負担の違い

知多公民館では、机椅子の設営・撤収を施設側が担当し、講師負担が軽減されました。

一方、瑞浪では、広い会場の机椅子設営に時間がかかる回もありました。

11-3. 次年度につながるフィードバック

複数施設からは、次年度も実施したい、続編を検討したい、別の講座を依頼したいなどの意向が聞かれました。

11-4. 施設ごとの目的を確認する

施設によって、夏休みの子ども向け企画、新規分野の講座、子どもと保護者体験、継続学習、イベント集客等、事業目的は異なります。

そのため、講師側が同じ講座を一律に持ち込むのではなく、施設側の目的を確認して調整する必要があります。

第 12 章 同じ教材でも地域ごとに形が変わる

12-1. 標準化と調整

ロボットプログラミング講座では、micro:bit、Tiny:bit、MakeCode、直進走行、S 字走行など、共通する基本要素を使用しました。

ただし、各施設で全く同じ進行になったわけではありません。

12-2. 90 分型

90 分型講座では、基本操作、RGB 点灯、直進走行、S 字走行を中心に実施しました。ただし、参加者の進行状況によって一部を割愛した回もありました。

12-3. 180 分型

180 分型講座では、90 分型講座の内容に加え、自由プログラミングや追加の走行課題を扱った回がありました。

12-4. 15 分イベント型

イベント型講座では、直進、スピン、LED 点灯など、短時間で結果を確認できる内容を中心に実施しました。

12-5. 4 回構成

4 回構成講座では、前回までに扱った内容を組み合わせて、自由にプログラミングする時間を設けました。

12-6. 地域ごとに「別講座」ではない

毎回、全く別の講座を作ったわけではありません。

基本となる構成を持ちつつ、実施条件に合わせて扱う内容や時間配分を変更しました。

今夏巡回講座は、共通する基本構成と現場での調整を組み合わせて実施しました。

第 13 章 地域施設を「学びへの入口」として見る

13-1. 専門教室との違い

公民館等の講座には、「プログラミングを本格的に学びたい」と既に決めている子どもだけが参加するわけではありません。

広報で偶然見つけた、夏休みだから参加した、保護者が申し込んだ、イベントで触れた、団体活動の中で体験した等、多様な参加のきっかけがありました。

13-2. ICT 未経験でも参加できる

マウス操作に慣れていない子どもも参加しました。

そのため、地域施設の講座では、「できる人だけを対象にする」より、「できなくても参加できる」ように説明や補助方法を準備することが考えられます。

13-3. 家庭で用意しにくい体験

知多公民館のアンケートでは、家庭では費用などの面から実施しにくい体験を求める声がありました。

駄知公民館では、「パソコンを子どもと保護者で触る機会がないのでよかった」という自由記述が 1 件ありました。

これらの回答は、地域施設が家庭では日常的に行いにくい体験への入口になり得ることを考える材料の一つです。

13-4. 入口は複数ある

入口には、情報を知る、申し込む、会場へ来る、パソコンを触る、ロボットを動かす、制作物を作る等、複数の段階があります。

私案としてですが、その入口で止まりにくくする工夫を施設側と講師側で検討することが考えられます。

第 14 章 地域・実施主体別に見た共通点

14-1. 条件は違っても試行錯誤は現れる

S 字走行や自由プログラミングでは、複数の地域で試行錯誤する場面が確認されました。

14-2. 保護者の役割も一様ではない

保護者同席でも、一緒に考える、補助する、見守る、子どもから教わる等、関係は異なりました。

14-3. 初心者対応は複数地域で必要だった

マウス操作等、ICT 未経験者への対応は複数施設で必要になりました。

14-4. 施設条件が学習環境を変える

床材、広さ、机配置、設営、募集方法、開催時間等は、地域・施設によって異なります。

講座内容だけを標準化しても、同じ結果にはなりません。

第 15 章 地域・実施主体別に見た相違点

15-1. 募集規模

春日井市では定員を大きく上回る応募があり、他の地域では定員に届かなかった回もありました。

15-2. 講座時間

15 分イベント、90 分、180 分、4 回構成まで幅がありました。

15-3. 参加関係

初対面、保護者同席、友人・兄弟、既存団体など、参加者同士の関係も異なっていました。

15-4. 主活動

ロボットプログラミング、Scratch プログラミング、缶バッジ制作、複合講座などがありました。

15-5. 評価軸

「どこが一番良かったか」ではなく、「どの条件で、どのような行動や発言が確認されたか」を整理する方が適切です。

第 16 章 行政・施設担当者に向けた私案

16-1. 他地域の数字をそのまま目標にしない

他施設で 40 組応募があったからといって、同じ定員や募集方式をそのまま採用すればよいとは限りません。

地域や実施条件によって状況は異なります。

16-2. 少人数開催も選択肢

応募が少ない場合でも、一定人数で実施する選択肢は考えられます。
ただし、少人数だから特定の行動が起きるとは限らず、事業費とのバランスも検討する必要があります。

16-3. 募集経路を記録する

応募人数だけでなく、「何を見て知ったか」をアンケートで確認すると、次年度の募集方法を検討する材料になります。

16-4. 講座目的を先に決める

イベント型なのか、体験型なのか、保護者同席型なのか、継続型なのか。
目的によって、適切な時間、定員、確認方法は異なります。

16-5. 地域施設は専門教室の代替ではない

地域施設の価値は、専門的な習熟度を高めることだけではありません。
下記のような最初の接点をつくることも、地域施設の役割になり得ます。

- まず触れてみる
- やってみて面白いと感じる
- 自分には合わないと分かる
- 家庭で話題にする
- 次の講座へ行く

第 17 章 今後確認したいこと

17-1. 募集方式の比較

紙、Web、自治体広報、SNS、学校配布等の違いを、今後も記録します。

17-2. 継続講座の参加変化

4 回構成で見られた自走、教え合い、内容の組み合わせと同様の場面が、別地域でも見られるかを確認します。

17-3. 保護者同席型の違い

保護者同席が、どのような条件で学びを支えるのかを観察します。

17-4. 制作型講座

缶バッジ制作のような、デジタル＋手作業＋完成物という講座が、地域施設でどのような位置づけになるかを確認します。

17-5. 既存団体と一般募集講座の違い

ガールスカウト講座では、2 名または 3 名での操作交代、参加者同士の相談や譲り合い、リーダーや保護者による支援が確認されました。

一方、これらの講座は、参加者同士に既存の関係がある団体活動として実施しています。

一般募集による多人数講座でも同じ運営方法が成立するかは、今後確認する必要があります。

第 18 章 まとめ

2026 年夏期巡回講座では、複数の自治体、公民館、コミュニティセンター、文化施設、地域団体等で講座を実施しました。

その結果、同じロボットプログラミング講座であっても、地域・施設・実施主体によって、講座の形が異なりました。

- 春日井市では、鷹来公民館と知多公民館で定員を大きく上回る応募がありました。一方、気噴南公民館では、自主講座として 60 分の講座を 4 回実施しました。同じ市内でも、主催者、募集方法、講座回数、参加人数などの条件が異なっていました。

- 瑞浪市では、応募人数は少なかった一方、少人数・長時間の講座で、自由プログラミングを続ける場面や、参加者同士で教え合う場面が観察されました。ただし、それらが少人数・長時間だったことによって起きたとは断定できません。また、施設担当者からは、募集方法の変更が応募人数に関係したのではないかという見方が示されました。
- 多治見市では、4回構成講座の中で、前回までに扱った内容を組み合わせてプログラミングする場面や、子ども同士で教え合う場面が見られました。
- 土岐市では、鶴里公民館で少人数のロボットプログラミング講座、曾木公民館の夏祭りで短時間の缶バッジ制作体験、駄知公民館で子どもと保護者による缶バッジ制作講座を実施しました。同じ市内でも、講座の主活動や実施形態が異なっていました。
- 恵那市では、複数のコミュニティセンターを巡回し、一施設で変更した説明方法を別の施設でも試しました。また、イベント型の短時間体験から通常講座へ参加した事例を1件確認しました。
- ガールスカウトでは、既存の関係を持つ参加者が、2名または3名でロボットやパソコンを使用しました。操作交代、相談、譲り合い、リーダーや保護者による支援などが確認されました。

このように、地域・実施主体が変わると、講座を振り返る際に確認する事項も異なります。

したがって、下記の事項を同時に確認する必要があります。

- 応募人数と、講座中に観察された行動の両方
- 満足度だけでなく次の学びへの接続
- 定員充足率と、少人数の講座で実際に確認されたこと
- 講座内容だけでなく情報の届け方

今回の巡回講座から得られたのは、「この地域ではこの方法が正しい」という地域別の正解ではありません。

むしろ、講座の基本構成を持ちながら、地域、施設、参加者、実施主体の条件に合わせて、入口、内容、時間、介入量、募集方法を調整するという考え方です。

地域施設で学習講座を実施する際には、下記の内容を含めて設計する必要があります。

- どんな講座か
- 誰に届けるのか
- どのように知ってもらうのか
- どのくらいの人数で行うのか
- どのような関係の参加者が集まるのか
- 施設側が何を目的としているのか

それぞれの地域に同じ講座をそのまま置くのではなく、同じ「学びの核」を、地域ごとの条件に合わせて置き直すことが必要だと考えています。

今回の夏期巡回講座は、その可能性を考えるための実践となりました。

付記 最終版の記録範囲

この地域・実施主体別編は、2026年6月20日から9月13日までに実施した夏期巡回講座について、最終参加状況、共通アンケート、施設独自アンケート、講師観察メモを基に作成しました。

9月6日および9月13日のガールスカウト向けロボティクス研修会も反映しています。

この地域・実施主体別編は、自治体や施設を評価・順位づけするものではありません。また、地域ごとの違いを固定的な地域性として説明するものでもありません。募集方法、講座時間、参加人数、会場環境、保護者同席の有無、参加者同士の関係などの条件を分けて整理しています。

観察された行動と、その理由は同じではありません。本文では、確認できたこと、講師による解釈、今後確認が必要なことを可能な限り分けて記載しました。

——— 以上 ———

改版履歴

ver.1	2026/09/22	初版
-------	------------	----

作成者・連絡先

作成者		こどものプログラミング教室 (有限会社エムバイビー)
	講師	廣瀬 清司 (ひろせ せいじ)
連絡先	メール	hirose@mvp.jp
ホームページ	URL	https://www.mvp.jp/

※ご質問などの連絡はメールにてお願いします。